

東京女子高等師範學校
日本幼稚園協會

幼稚園の教育

主 幹

堀 七 藏

第 二 十 七 卷 一 月 號 第 一 號

口 繪

小學校に於ける「觀察科」……………山内俊次

觀察の地方色……………

正月の胡瓜はどうして出来るか大岩金

遊戯、鬼……………土川五郎

パンを焦した王様……………金子彦二郎

わりふ、紙風船……………及川文子

白帆が走る……………柿谷華天子

創作「いてふのおうち」……………中村楠雄

童話「おもちや」……………附屬幼稚園

雜 錄……………

菊判全一冊洋綴
 紙數七百七十餘
 插畫十五十餘
 定價金五圓八拾錢
 送料金貳拾七錢

一六價送
冊百參科
洋播圖八
湖圖八拾
近八拾八
數十錢銀

本書一度び世に出でて好評赫々版を重ねることに四益々その要求は盛なり
本書は心理學的生理學的の實驗研究
の取扱ひ教育的方法等々を插入したる
多數の插畫を應用し懇切丁寧に詳述せ
られたるものである。

全一冊
定價貳圓參拾錢
送料拾八錢

本書は單に知識の敘述たるに止らず進んで兒童研究の方法を説いて其問題を提供した。

全一冊
定價參圓五拾錢
送料拾八錢

本書は兒童の惡癖の性質原因の研究とその矯
正法の心理學的の概念である。簡明に説述し
たる實際的兒童教養の良書である。

定價四圓五拾錢
送料拾八錢

全一冊
紙數七百四十頁

定價四圓
送料十八錢

[illegible]

番七二四八三京東替振
番五三三三三牛話電
店書館文中區込牛市京東
地番九州町良甲所行發

覽台下殿族皇號每誌本賜

誌雜習學大

編輯會究研導指習學

東京兩高等師範學校
廣島高等師範學校
奈良女子高等師範學校
府立中學校・女學校

各教官諸
先生が毎
號執筆さ
れます。

（毎月一回一日發行）
趣味と學習を兼ねた雜誌！
あなたを優等生にする雜誌！
全國小學生間大評判雜誌！

男子幼稚園

◎特に四歳以上の男生の友として編まれたもの、初め
て理想の學習雜誌を見たところ好評である（定價卅錢）

男子一年生

◎一年生の人には全部お読み下さい、學校といふものを
理解させ好にさせ天分を助長させ良雜誌（定價卅五錢）

男子二年生

◎學課に彩色繪に讀物に光・影・陸・離・時間の經つものも忘
れる。本誌讀者は全部優等生。（定價卅五錢）

男子五年生

◎初等教育界の權威者が全部執筆せる好雜誌他にあり
や、難解の學課も直ちに氷解さる。（定價四十錢）

女子幼稚園

◎男子幼稚園と同じく四歳以上の女生の友、切抜貼込
理科算術話童話諸繪の稽古等兒童の好同伴（定價卅錢）

女子一年生

◎群小雜誌と選を異にし飽く迄も學習に主眼を置き自
然に成績を優良ならしめる兒童の友（定價卅五錢）

女子四年生

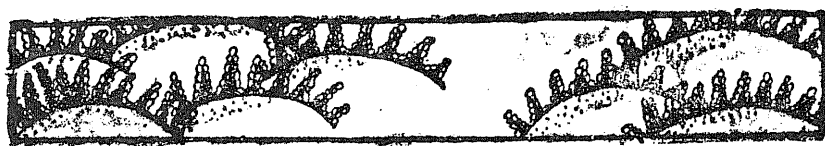
◎その人を見んとせばその讀む本を見よ一本誌の如き
天下一の良雜誌の讀者は模範生と仰がる（定價卅五錢）

女子六年生

◎引續き本誌を愛讀せば中學校女學校の入學試験も少
しも恐しい事はない、諸君の救ひの神（定價四十錢）

東京大阪
市保町六番地
神田區
小學館
振替
東京一五〇一
大阪二〇〇五
仙台一五〇八
番

發行所



育教の兒幼輯編會協園稚幼本日

會長

主幹

贊助員

東京女子高等師範學校校長

東京女子高等師範學校教授

茨木清次郎

堀七藏

東京高師教授

巖谷秀雄

東洋大學教授

高島平三郎

東京帝大醫科講師

乙竹岩造

東京府女子師範學校校長

田子一民

東京高師教授

太田孝之

東京女子高師囑託

龍山義亮

慶應大學教授

大瀨甚太郎

帝國教育會理事

土川五郎

東洋幼稚園園長

唐澤光德

松江高等學校校長

野口援太郎

早蕨幼稚園園長

岸邊福雄

京都帝大教授

乘杉嘉壽

帝國教育會會長

久留島武彦

東京女子高師教授

弘田俊夫

東京高師教授

澤柳政太郎

東京女子高師教授

倉橋惣三

東京女子高師教授

佐々木秀一

東京帝大教授

松村武雄

東京女子高師教授

菅原教造

奈良女子高師校長

松本亦太郎

醫、文博

富士川游

奈良女高師附屬幼稚園主事

榎山榮次

東京市學務課長

藤井利譽

東京高等學校校長

三田谷啓

東京女子高師講師

藤五代策

東京帝大教授

湯原元一

文部省

福士末之助

東京帝大教授

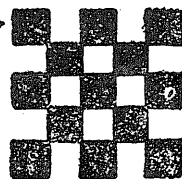
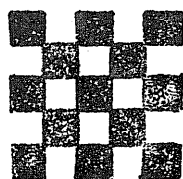
吉田熊次

文博

谷本富

東京女子大學長

安井哲子



號 一 第

育 教 の 兒 幼

卷七十二第

—(次 目)—

口 繪 おもちや屋遊び

小學校に於ける直觀科……………山 内 俊 次…二頁

觀察の地方色

ありのまゝ……………早 川 節…二頁

仁川公立記念幼稚園觀察案……………佐 治 サ イ…一八頁

小樽幼稚園の近況……………三 上 ふ ゆ…一九頁

正月の胡瓜はどうして作るか……………大 岩 金…二頁

遊 戯、兎……………土 川 五 郎…二九頁

パンを焦した王様……………金 子 彦 二 郎…三頁

ぬりゑ、紙風船……………及 川 文 子…四六頁

白帆が走る……………柿 谷 華 天 子…四七頁

創作
童話 「いてふのおうち」……………中 村 楠 雄…四八頁

おもちや屋遊び……………附 屬 幼 稚 園…四四頁

雜 錄……………五 六 頁



幼稚園雜草

◆四六判特製美本函入
◆定價金貳圓五拾錢
◆送料金拾八錢
◆紙數五百二十餘頁

振替東京一三三五六番
電話浪花

東京市日本橋區大傳馬町二丁目

内田老鶴圃

[illegible][illegible]

倉橋惣三先生序
日本幼稚園協會編

定價參圓八拾錢
送料拾八錢

萬國幼稚園協會案
日本幼稚園協會譯
倉橋惣三先生序

定價壹圓五拾錢
送料拾貳錢

おもちゃ屋遊び





、號一第 育教の兒幼 卷七十二第

月一年二和昭

一、教育で家庭教育位重要なものではありません。家庭教育の良否は實に人一生を支配し國家の發展を左右するのであります。最近の學術は益々家庭教育の重大なる使命を立證し近時の社會現象は善良なる家庭教育の必要を痛感せしめてゐます。

一、家庭教育の短を補ひ幼兒の心身を充分に發達せしめ將來受くべき學校教育の基礎を築くものは幼稚園教育であります。幼稚園教育の重視すべきことは天下一人も異議がないのであります。

一、幼兒の教育は本邦唯一の幼稚園教育に關する發表機關であります。而してまた本邦唯一の家庭教育雜誌であります。

一、幼兒の教育は幼兒の教育、即ち家庭に於ける教育と幼稚園に於ける教育、更に小學校初學年教育に關する事項は細大となく網羅し、以て家庭教育の向上を計り、幼稚園教育の進歩發展を期する大抱負をもつて産れたもので有ります。

小學校に於ける直觀科

東京女高師附屬小學校

山 内 俊 次

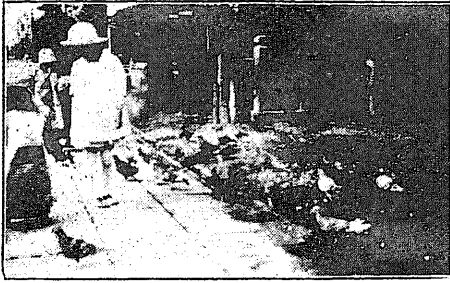
一、はしがき

茲に私の述べようと思ふ所は、直接幼稚園といふものに、全く経験のないものの所論であります。けれども小學校に於ける直觀科は、私の學校に於ては、幼學年にのみ試みた一教科であります。而して、幼稚園教育の直後を小學校教育が引受けるのであるから、この意味に於て特に小學校初學年教育と幼稚園教育とは、全く無關係ではあり得ないのであります。

従つて、私の小學校で從來から採用してゐた、幼學年の一教科としての直觀科が、最近幼稚園に採り入れられた觀察といふものと、全く無關係でもなからうと考へ、何等かの御參考までにと思ひ、特に小學校に於ける直觀科について述べる所以であります。

二、理科と直觀科

小學校に於ける理科教授の變遷を考へて見ると、驚くべきものがあります。過去の理科教授は、學者



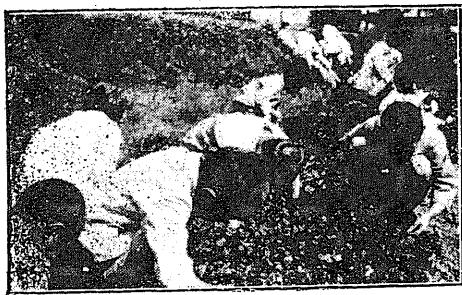
鳩の直観

の研究發表した自然科學の事項を、單にそのまゝ兒童に口移しにし、而して理解記憶を強いたといふ様な事實もあります。兒童は、短い時間内に多くの知識を得ることが最も優れた學習であるかの如くに考へさせられました。而しながら、その知識は、所謂辭典の内容のやうなもので、いささかも生きてゐない。事柄を單に數多く知つてゐても、それが、兒童の生活をして豐潤ならしむることは、いささかも出來ませんでした。

而して教育學說の進歩、教育實際家の實地經驗等から、漸次兒童本位でなければならぬといふ思潮になり、又各個人の觀察實驗を尊重せねばならぬといふやうな考へとなつて來ました。茲に於てか事物を何によらず分析的に、細より徹に入つて授けやうとして來ました。生きたものもその生命を無視して自然界から切り離して單獨の存在物として不自然な研究をせしめやうとするやうになりました。一個の、伸びんとし、生きんとし、榮えやうとする植物としてではなく皮を剥ぎ、髓を抜き、それを更に薄く削つて顯微鏡下に覗いて構成單位である細胞について調べやうと努めました。生きた溫い血液の通つてゐる動物として取扱はないで、皮膚を剥いだ筋肉、筋肉を除いた骨骼について究めやうとしました。生命のあるものとして取扱はずに、往々として、之等

を一材料として授けやうとする態度でありました。かゝる態度を全然、否定するものではありません。科學の研究には是非とも必要な方法でありませう。而しながらそれを直ちに採つてもつて、まだ心的發達の未熟な兒童に適用せしめると云ふことは、少くとも妥當な方法ではあり得ないと思ひます。うるはしき兒童の心情を以てしては、何物といへどもただちに物質的に、機械的に、分解的に死物的にのみ取扱ふことは、一大驚異であらう。人間を以て直ちに猿より進化したといふやうな一事實から、猿も人間も混同してしまひ、人間の人間たる所を認めないで、同じく一個の材料としか考へないといふやうな弊をかもすやうな、おそろべき結果となり、之がやがて、小學校に理科を課するが故に、兒童の心的發達をして枯渴せしむるといふ結果を生じ、自然科學教授は、遂に人格を淺薄ならしむるものといふ様な誤つた考へを持つ者さへ出來たといふやうな原因となるものでありませう。

由來自然研究の態度に二方面があると思ひます。第一は學問のための自然の研究であり、第二は生活のための自然の研究であります。小學校に於ける理科教授は、何處までも、自然に對する態度を涵養せしむることが目的であらねばなりません。従つて、自然研究の二方面中後者を採用するのが妥當であると思ひます。それがためには、先づ以つて自然に接觸せしめるといふことを考へなくてはならぬのであります。若い學者、小さい物識りを作り出さうとすることよりも、自然の兒、自由に伸びる兒として教育したいのであります。



クローバーの直観

從來の理科教授が餘りに分解的、部分的態度であつたのに鑑みて、自然界の存在物としてもつと綜合的、全體的、關係的に取扱ひたい。材料としては取扱ふけれども、一個の尊い生命のあるものとして、單に機械的には取扱ひたくない。統一ある一個の完成したものととして取扱ひたい。知識として注入するよりも、各兒童の研究的態度を尊びたい。そして自然界の美といふものを感得せしめたいといふ傾向になつて來たことは、從來の理科教授の反動とも見るべきことで、實に人間教育のためには、喜ぶべき現象と見ることが出來ませう。

實驗心理の證明する所に従へば、もはや大人の思考の結果を、直ちに兒童に適用せしめるといふことは無意義のことになりました。兒童には、兒童の世界があります。自らの力で、自らの世界を開拓し行くところに尊さがある。それをよろしく教導することが教育の仕事であります。

小學校に入學してから、四年目にして、初めて理科の教授をせねばならぬといふことは、どう見ても不可解のことであります。前にも述べた様に學問的の學問を授けるといふならとも角も、一般常識として、自然界そのものを知らしめ、兒童をして自然に接觸せしめ、これを愛好する精神を養ふといふことについては、入學以來三箇年を、何故自然界から隔離せしめ

ねばならぬであらう。生れて以來自然に接觸してゐるものを、小學校に入學してから三年間自然界から教室内に隔離することの必要は、何處を何うしても考へ得られないことであります。かく考へ來る時、尋常一學年より、乃至は幼稚園から理科的のものを課することの當然さを高潮せざるを得ないのであります。

從來の理科といふ概念からいふと、當然高學年でなくては用のない、理解することの出來ない教科であるかも知れません。文部省がやつと、尋四にまで、引下げて來たのは、やはり未だ理科の概念が從來のものにとらはれてゐることを證明することが出來ると思ひます。又その理科書中の内容を考へても記載する所何れも皆五年以上に課した理科書を引下げたに過ぎないことがわかります。此の如くであつては、私共の所謂自然に接觸せしめるといふ様な考へとは可成りの巨離があります。數年以前より、我が校に於て、一年、二年、三年兒童のために、直觀科なるものを一教科として課して來た所以は、實にそれがためであります。今や幼稚園令の改正と共に保育項目として新しく「觀察」といふのが採用されるに至つたことは、小學校よりも、幼稚園の方が一步を進んじた感があります。然しながら私共の考へてゐた様な幼兒のためのかうした項目が採用されたことは、誠に我が意を得たものとして、いさゝか愉快を覺ゆるのであります。將來、幼稚園の觀察と小學校の理科との間に、三年間の空虚が存在することとなつては、甚だ不自然であるから、恐らく何等かの方策が講ぜられる様になるであらうと思ひます。

幸として我が校の從來から採り來つた、一年二年三年の直觀科の如きは、正に時宜に適したものであらうと思ふのであります。

三、直觀科の本領

これまでの理科教授の弊は、自然科學の學理、法則を、直ちに兒童に授け、兒童をして直ちに科學者のやうな態度をとらしめやうとしたところから生じて來てゐます。自然界の眞、善、美乃至は不可思議に對する、愛好心、同情心、好奇心等を抱いて、自然界中に自己を溶かし込むといふ態度が從來の理科教授の結果からは得られにくかつたのであります。兒童にとつては、不可思議なもの、不可解なもの、珍らしいもの、面白いもの等があつても、理科の時間に取扱へば、單なる材料となつて、生命のもぬけの形骸となり終つた感があります。即ち理科といへば、直ちに以て機械的、分解的、部分的に取扱ふ學科の如く思はしむるに至つたことは、從來の實際家の重大な責といつてよろしいでせう。

かうした取扱ひは、大人か、又は特殊な専門的研究をする人のためには、誠に好都合であつたに違ひない。然しながら、一般小學校の教科課程中の理科としては、あまりに兒童の本性といふものを無視しすぎてゐると思ふのであります。私共は、この點を救済する意味に於て、又幼年兒童の自然科學に對する取扱法を樹立する意味に於て、自然界に存在するもの、全體の中の一部としてのもの、生命あるも



花 草 の 秋 初

のとしての材料を、發達の程度に應じて授け、兒童の自發活動を重視した所の所謂自然研究といふものを主張したいのであります。

歐米のネーチャー・スタディは、科學の初步とか大意を教へやうとする學科ではなくて、全く常識學といつたら適切であります。その方法は前述した様に、自然に對する態度を養ふを以て目的とし、若い科學者や、物識りを作るのが目的ではありません。即ち自然界のあらゆるものを對照として觀察研究せしめやうとするもので、それが大人の研究的態度を模倣するのでなく、各兒の自發活動を重視し、夫々の見るところを以て觀さしめ、思ふところを究めしめ、感ずる所を知らしめやうとするものであります。

従つて、何物と雖も常に、自然界中の全體の一部分を構成する一物として、有機的關係あるものとして取扱ひ、全體から眺めつゝ漸次部分的に這入らうとする態度を取りたいのであります。これが從來の理科教授と大いに異なる所で、個々の事物を切れ切れに授けて、終りにそれを統括して體系を整へやうとするのと比べると正に反對な行き方であることが出來ませう。

故に從來の理科教授の態度が、科學的、専門的、學理的であつたのに比べると、ネーチャー・スタディは、正に常識的、一般的、直觀的であります。



コホギの直観

文部省理科書に記載されてあるやうな事項をそのまゝ取扱ふことは、自然界を研究するには、少しく迂遠な方法だと思ひます。特に、今日初學年から理科的に自然に接近し、接觸せしめやうとするためには、ただ單に理科書の内容をそのまゝ採つて稍々程度を引き下げて授けるが如き姑息手段の妥當でないことは明々白々のことだと思ひます。こゝに於て、ネーチャー・スタディの運動は必ず勃興し來ることと信ずるのであります。このネーチャー・スタディの目的とするところは、自然界に接觸せしむることによつて、兒童の心の眼を開かしめ、彼等の認識の世界を擴大せしめ、その生活をして溫みあり潤ひあら

しめ、而して意義あらしめ様とするのであります。生々した兒童に生きた教師が、生々進轉その窮りのない自然界のものすべてを教材として取扱ふのであるから、その教授は自ら生きてゐます。吾々は自然界から一刻も離れて生くることの出来ないものである以上、自然界の眞髓に觸れようとして努力するネーチャー・スタディの態度こそ、實に尊いものといはねばなりませんまい。

ネーチャー・スタディの名稱はこれを種々に譯して我が國に於ても實際に試みてゐる所が少くないと思ひます。自然科、觀察科、直觀科の如きは何れも異名同意義のやうであります。文字の通りにいふならば、自然科な

どは最も適譯でありませう。けれども、その精神を考察すると、要するに、自然界を對照として研究するのであつて、自然界そのものを直觀しなければならぬ。従つて、こゝに直觀科といふのが、最も妥當な名稱であらうといふので、我が校に於ては、これを使用してゐました。たゞ、今回の幼稚園令改正と共に採り入れられた觀察の名稱も亦恐らく同一の考への下に生れたのではないかと考へるであります。

四、直觀科の實際

一二年の兒童に小さい植木鉢を、凡そ二人に一個宛位に具へると、彼等は、よろこんで砂をかきあつめ、土を掘り出して、これに盛ります。そして何をするのかと問へば、花を植ゑるのだと答へます。花瓶に挿してある花を與ふれば、根、莖、葉の完滿したものでなくては、駄目だといふことをよく知つてゐます。

私は最初から大豆の種子を播かしめて、各の鉢について、發芽からの變化を直觀せしめやうといふ計畫であつたものですから各兒に、大豆を二粒づゝ與へて之を播かしめたのであります。そして教室の窓際にならべて、おいたのであります。各兒は、自分の力によつて、鉢に土砂を盛り、自ら大豆の實をこの中に播いたのであるから、朝夕水をやつて、ひたすらこの發芽をまちあぐんでゐました。



て に 場 砂

ものの十日ばかりにして、やつと土をもら上げて來ました。兒童の喜びは一通りではありません。これからの毎日の目に見ゆる變化は、彼等の直觀帳に記載されたのであります。

豆に白い足が出て、高く上つて土をもち上げたこと、だん／＼豆の白いのが縁になつて來たこと、又日が立つと、豆の間から更に葉が少し出て來たこと、そして、日に日に伸びて來ることなどが直觀されて記載されたのであります。

凡そ二週間ばかり立つと、相當に伸びました。すると、一兒童はさもし不思議さうな顔つきで『先生、皆さんの鉢の大豆が、揃ひもそろつて、窓の方へ垂れ下つてゐるのはなぜでせう？』と尋ねるものがありました。すると又一兒童は僕は前に水をやる時にこつちの方へ鉢をまはしておいたが、又窓の方へまがつていつたんです』といふものがありました。

始めより漸次縁になつて行くのを直觀したこと、揃つて窓の方へ向ふことを直觀したこと、その上、鉢をまはしても又窓の方へ向つてまがつて行くことを兒童自身が發見したことは、必ずしも客觀的の發見ではありませんが、而しながら彼等の主觀的發見として實に尊ぶべきことではありますまいか。向日性についての百の説明も一見に如かないであらう。葉縁

素の必要な所以を單に説明したとて、それがどれだけの實値があるであらう。人から教へらるべきものか、物について自ら學ぶべきものか、二者何れを尊しとなすか。私共は過去を猛省して見なければならぬと思ひました。

幼學年に於ける理科的の取扱ひは、常に自然界の直觀でなくてはならないことは、前述せる通りであります。自然界を教師からや、書物によつて間接に教へられるのではなくて、自己の直觀によつて印象し知覺することが即ちネーチャー・スタディであります。これが我が直觀科の仕事なのであります。只單に知識をのみ多からんことを望むのが本望ではない。自由な兒童の心により、この大自然を直觀することによつて、その中に自己を見出すことが本旨であります。大自然に對する態度愛情を養ふのが其の使命であります。この尊い働きを自然の兒童中に見出してやらねばなりません。萬人共通に感ぜしめ同一事項を記載筆記せしむることに勢力の殆んど大部分を消費して來た、從來の理科とはその趣きを異にしてゐるのであります。

種子が強い皮を破つて、明るみへ生れ出づる力、黒い土を持ち上げて暗黒から光明へと伸び行く力、太陽へと傾く生命力、これらの自然の力は、それを直觀することによつてのみ、幼き兒童の心底に深く印象され得るものであります。故に、一時間や二時間、若くは一週間、乃至は一ヶ月で完結して効果を納めやうとするのは、少くとも直觀科として妥當ではあり得ない。速かに良い結實を眼前に見ることは出來ないにしても後に好結果を得べき素地を作り得たとすれば、それで充分ではありますまいか。私共は幼學年兒童の直觀科に於てこの程度の事を考へてゐるのであります。――

觀察の地方色

觀察は地方々に依つて面白い相違のある事は申すまでもありません。此度、特に御寄稿下さいました左の方々に厚く感ずると同時に、今後尙ほ續々御投稿下さいますやう、お待ちいたして居ります。尙ほお寄せ下さいました數々の原稿の中、編輯の都合で今月號に掲載出来なかつた分は、引きつゞき來月號に掲載いたします。御含み下さいませ。(編者)

ありのまゝ

愛國婦人會臺灣支部
私立臺北幼稚園
早川 節

十一月二十四日でございました。空色のキヤツプ、空色のエブロン可愛らしい姿のお嬢さん、坊ちゃんに「お早うございます、お早うございます」ととびつかれ、ハイお早うございますと返答しながら門をくぐり「一寸おまちしてゐて頂戴よ」と事務室に入ると机の上に何かのつてゐま

した。それは島人の所謂内地便で、日本幼稚園協會からの封書と幼児の教育十一月號でございました。島人の所謂内地便とは、本州からの通信は遠い南島にある私共にとつて多大のよろこび、たのしみ、希望を齎らすものであるかを意味するものでございます。殊に斯界に權威ある月刊雜誌幼児の教育は、十一月號を手にしてはや十二月號が待たれるといふ風で、之は、私にとつて愛兒そのものの様にさへ感じられるのでございます。御書面の中には「貴園の冬期に於ける觀察の實際計畫其

の他に就て御寄稿頂き度く誠に勝手がましき申し分ながら十二月三四日頃迄に届きます様云々」とございます。マアかの親愛なる幼児の教育の一月號に觀察に就て配載されるその材料として、はる

／＼求められた思ひかけぬ光榮にあふるゝ感謝の念がわくと同時に、さあこの重大な問題、而も幼兒と生活する間、過ぐるどの時にも心してゐる、思ひなしにはゐられないこの問題でありながら、扱て記録してお答へするにはどうすればよいか、と考へながら、十一月號のページをくります中、「觀察の地方色」といふ大きい活字に視線を射ました。そして求められた第一地方南端にあるこの島であり、この園はその一部分に當り、又全部を代表する事に思ひ至りました時、如何にしようかとの深さを増しました。然し餘り日數が切迫して十分な事は、などの申し譯け、辯解は前置きせず、又特におたづね頂いた當地方の特色の發揮が

出来るかどうか、御満足、否、御失望を生ずるのであらうとさへ、自らの憂へもそのまゝにたゞありのまゝ、系統も秩序もなく申し述べて日頃の謝意を幾分にても表し度いと存じます。

冬期に於けるといふ條件の御發問に對し、實は冬らしく扱ふべき觀察の對象がございませんので困りますといふ事を第一前提に申して置きたいのでございます。即ち自然現象に四季の變化を観る事が極めて少なく、幼兒の觀察力に訴ふるに最も適する中心である四圍の色彩が、殆んど年中一樣であるためにその自然界、ひいてはその人事界に對する觀察は不明瞭に陥り易いのでございます。一樣であると申しますのは、南國色、即ち野も山も草も木も緑の色彩、夏景色でありまして、秋、冬の色は殆んど觀られません。具體的にその一斑を申せば、秋の静夜をいろ啼く虫の音もきこえず、木々の紅葉、落葉、霜枯、赤い柿のすゝなり

に鳥のつひばむながめ、栗、椎、どんぐり拾ひ、菖
狩りなどのたのしみも味はれません。東風吹かば
香おこせよ梅の花も近く縁先にかほらず、庭には
いつも濃厚な赤い花（佛桑華^{フツサウダ}）等が熱帯を思はせ
るばかり、霜はおらず、霜柱たゝず、薄墨色のド
ンヨリした雪空を仰いでヒラ／＼おちるむつの花
をあつめ、積る雪の中の雪合戦のたのしみもなく
吹雪のさむさにもおそはれず風の子としての世
界は殆んどございせん。かうした冬ごもりを知
らぬ兒らは、木々の芽萌え、春の新緑に更生のよ
ろこびも感ずる事が出来ず百花爛漫の候に蝶と躍
る様の柔かいすがたにもなり得ないのでございま
す。灼熱の中に戦ふ強烈な氣分と生活に育つて居
ります。

かうした自然の中にあります爲に、コタツ、暖
爐、綿入其他防寒具などの事は誠に縁遠い事にな
つて居ります。併し多少なりともその缺點を補ひ

度い、その方面の認識力を養ひ度いと思ひまして
はその材料を見出すために可なりの苦心をいたし
ます。或はこゝとも雑誌を興へる時、或は黒板の畫を
かく時、或は黄色くなつて、又稀に辛うじて紅葉
した落葉を集めて、或は遠山峰に降雪を遙かに眺
めさせ等して成るべくは自然、自由、生態を主と
してこの科の使命を完了したいとつとめますが之
等の點に乏しい自然であるために、或は談話、遊
戯、歌、手技等の材料の選擇により或は新聞、通信
等により、他地方の紹介によりなどとして好ましか
らね事ながら説明的に扱ひ多くは想像力に訴へ
て、なるべく實際に近くこの方面の觀念を養ふに
とゞまるといふに過ぎぬ事が多く生ずるのでござ
います。

以上は「ない」といふ悲觀的の地方色を御報告い
たしましたが、この時が過ぎますと南國の誇りと
する天地自然が展開されて、兒らはかなりの暑氣

にも撓まず豊かな天恵を享けて毎日を過す様になります。その得意な例を二三述べる事にいたします。

今年五月初旬、園児各兒、小さい鉢に朝顔の播種をさせました。二、三日にして、芽を出して、毎日その生長をよろこんでゐる中に、六月中旬頃から蕾、開花、種子をとるまでになり、七月初旬の保護者會には、お花見の時が過ぎてしまひまして、七月十日第一期終業式の時は「又植ゑませうね」と、澤山種子を集めました。夏休み中七月三十日明治天皇祭に臨時召集をして皆さんの御機嫌を伺ひました時、第二回の播種をいたしました。九月十一日第二期始業式の日には、はや蕾が多く開花するものさへあり、皆さん久しぶりに會ふニコ／＼に「アラもう花が咲いてゐる、白が、紫が紋りが、桃色が」と又ニコ／＼。それもかへり咲きといふ様なあはれな花ではございませんでし

た。かくて朝顔のたのしみもはや終りましたので、鉢の土もかへて十二月に入らんとする今日、金盞花の種播をして、鉢は温室にも入れず「私のはこれ」「僕のはこれ」と、花壇の圍りにきれいに排べ「いつ芽が出るか、どんな花が咲くか」とたのしんで居ります。（今日の室内温度は七十二度九）

スイ／＼立ちならぶ麥畑をしりませんが一年に二回、田にお米が出来て、二期作が丁度此の頃である事を新嘗祭に話して居りました。

一昨日、近くの（市内、四丁程距る）新公園に遊びに行きました。翌日の新聞は「晩秋の日をあびて可愛らしい台北幼稚園々のお辨當」と寫眞が出て居りましたので會話をいたしますと、公園に行つて何がおもしろかつたでせう「寫眞を撮りました」「今朝新聞に出てゐました」「お顔の見える方は」「私も／＼」「何の木が皆さんの上に立つて

ゐましたか木もうつつてゐたでせう」「アレは撥
擲樹」かうした風に、熱帶植物を自然に知つて居り
ます。果物にしても無花果、ざくろ、いちご、さ
くらん坊、を知らぬ者は多く、バナナ、パイナップル、木瓜などを好みます。動物に對しては余
り異つた觀察方面を経験いたしません、純粹の
牛よりは水に遊ぶ水牛が多く、豚、鷺、家鴨な
どはよく識つて居ります。この種の觀察も（動植
物界）内地に於ける代表的のものはその標本を得
る度に觀せる様につとめて居りますが、其の他は
特色ある熱帶植物に、花に、果物に、親しませる
様自然に任せて居ります。以上主として自然界の
事を述べましたが尙眞に地方色として人事に關す
る方面を附言しておき度いと存じます。當地が島
であり、植民地である上に、一般に内地と台灣間
又島内の交通が頻繁で、刺戟をうくる事が多くあ
る爲に、その方面の觀察力が進み、地理的、歴史

的初步觀念が養はれてゐる様に思はれます。例へ
ば、台北から基隆迄汽車で、基隆から汽船に乗つ
て三つ泊つて四つ泊つて内地に着く、内地のどこ
にときけば、門司！神戸！といひ得る者もあり、
歸省した人には必らずその旅行談を聞きますと、
「扶桑丸、蓬來丸に乗つて神戸に着いて、東京に
行つた、大阪に行つた、お船で大きい魚を觀た、
潮を噴いてゐた、大きい浪がお船にぶつかつた、
でもひつくりかへらなかつた。船にボートがあつ
た、煙突が二本あつた、マストに旗が立つてゐ
た」など、「内地のおもしろかつた事はチン／＼
電車が走つてゐました」といふお話位で「僕は台
灣がすき」と幼な心にも住み馳れた地戀ふる心根
はいちらしく、植民政策も成功と笑話にのぼる事
もございます。本島人、山の人（生、熟蕃）等異
人種と隣接してゐる爲に、その風俗に對する觀察
力も伸びて、國際的觀念を養ふによい資料を得て

居ります。殊に近頃總督府當局に於て、初等教育より内台人の共學を認可せらるゝに及び、幼稚園

時代より、生活を共にさせたいと希望者の入園申込みもあり、現に當園でも十三名本島人を收容して居ります。かく本島人を共に扱つてゐる經驗上、

彼等の觀察狀態を觀ますに彼等は家庭に於ける日常生活を殆んど全然異にしてゐる結果、事物に對し大分觀察眼を異にし理解に苦しむが如き傾向も見えますが、之は言語の關係もあり、一年を経過すれば殆んど全く同化し得るものであります。幼き時代の貴いこの作用、即ち彼等は相互に單、單純に和衷して同一標準に進み得る結果をおさめてよろこんでゐる様な次第でございます。

申し上げ度い南國色を枚舉すれば限りはございませんが貧弱な文筆を以ては盡し難く、以上誠に大概の輪廓のみで内容の詳細秩序を缺き、徒らに貴重な紙上を汚しました事をおそれペンを擱きま

す。皆様の御健在と御精勵を祈りおわかれいたします。大正十五年十一月三十日

仁川公立記念幼稚園觀察案

仁川公立記念
幼稚園
佐 治 サ イ

冬 期 項 目 摘 要

- | | | | | |
|---|---|---|-----------------------------|------------------------|
| 1 | は | と | 形態 食物、冬期あそび居る有様、切りがみ、書き方と連絡 | |
| 2 | 冬 | の | 落葉樹、常綠木(マサキ、モミ、植物の冬ごもり等) | |
| 3 | う | さ | ざ | 形態、食物、切り紙、書き方と連絡 |
| 4 | 雁 | | 形態(標本 實物手に入りし)とぶ有様(實物) | |
| 5 | あ | ひ | る | 形態、食物、あそび居る有様 |
| 6 | ね | ず | み | 形態、習性、食物、切り紙、書き方と連絡 |
| 7 | 海 | の | 魚 | 標本又は實物(スズキ、サバ、ホウ、にてなど) |

- | | | | | |
|----|---|---|----|------------------------------|
| 8 | 溫 | 室 | 實物 | 溫室内の草木の茂れる有様 |
| 9 | 水 | 仙 | 實物 | |
| 10 | 福 | 壽 | 草 | 實物 |
| 11 | ゆ | き | 有様 | ふる有様 つもつた有様 とける
(切りがみと連絡) |
| 12 | 氷 | 氷 | 柱 | 實物 |
| 13 | あ | ら | れ | ふるありさま、解ける有様 |
| 14 | オ | ス | ト | リアル 實物につきて |

小樽幼稚園の状況

小樽幼稚園 三 上 ふ ゆ

當幼稚園は私立小樽實科高等女學校及小樽實踐女學校内の一部に併置し、幼稚園としての設備充分ならず所謂家庭的の幼稚園であります。入園の幼稚は現在僅三十二名であります。幼稚は何れも元氣能く毎朝八時頃より昇園して居ます。園内に

入るや先づ、先生御はやう婆やさん御はやうと禮を述べ、靴をとり手袋外套を取り、帽子、かばん、お辨當は自分の名札のある處に持行き、夫々其處に置きまして室内に這入り、豫て設けの暖爐に據りて皆暖を採つて居ります。九時半始業、朝の挨拶、遊戲次に御話手藝等致して居ります。

毎年十一月より翌年三月頃まで雪の爲外出すること出来ません。然れども幼兒が孰れも雪を大層面白く感じて、少し位の寒を思はず屋外出遊を喜ぶのであります。晴天の日は外部の雪中で雪だるまを作り、又は旗採り或は兵隊遊等をしますが此頃は毎日の降雪にて雪遊は更に出来ません。

又天氣悪しく外遊出来得ぬ日は園内運動場に雪を運び來りて雪にて山を作り木の枝を挿して山に木を植ゑるまねを爲し、又女兒は茶碗を以て御馳走を作る遊をして喜んで居ります。

又近來に於ては降雪の爲、外出運動出来ぬ爲、

園内にて遠足と申しまして遠足の仕度を爲し、おにぎり御菓子等各携帯して來り、又室内にも木の葉の様な物を飾り付け教室を廣く片付け、其日一日は皆思ひくの遊方を自由にする様に致し幼兒は之を以て何よりの樂と致して居ります。

毎月曜日には指の瓜を取りて居ります。又晝食は午前十一時半より始め、食事後は暫く暖爐を取卷いて暖を採つて居ります。

幼兒は毎日午後一時或は一時半歸つて居ります。其晩は園内にて爲した事を父兄に話して父兄より褒められた事や、面白かつた事を翌日園に來て幼兒と親しく話をして居ります。

以上當園には別に何等の設けもなく從て御參考になるべきものとて無之、洵に耻入候得共聊か申上候。何卒今後皆様より何分の御教示を賜はり度偏に奉懇願候。

先生一「今日の觀察に何を見せませう」

先生二「さあれえ」

先生三「困つて仕舞ふわ。何一つ買ふつたつて豫算もないんですもの」

先生四「ほんとに、何にも出来はしない。」

× × × × × ×

子ども一「こんな草がはえてるよ」

子ども二「小さな花が咲いてるわ」

子ども三「葉も面白い格好だれえ」

子ども四「根をぬいて見ようよ。面白い根だなあ」

皆「面白いなあ」。

正月の胡瓜はどうして出来るか

東京女高師助教諭

大

岩

金

正月お刺身等のつまとして山葵と席を共にし、或はサラダやサンドウキツチなどに使はれます胡瓜はどんな具合にして食膳に現はれますか。その一通りの生ひ立を調べてみますのも全く無意味なものでもあるまいかと思ひまして、又本年も本法を述べまして、我田に引水させて戴く事に致します。

初て正月の濃厚な御馳走と共に食べ合はせて皆様の味覺に爽な味はひのある胡瓜の中には小笠原、八丈、千葉、静岡（伊豆）等から上京するものもありますが、それ等大部分は晩夏から初秋にかけて播種し比較的人工を加へる事が少なく、天與

の暖氣に育てられたものが多い様であります、こゝに引水しやうとします胡瓜はその雪や氷を外に専ら人工を加へまして、蝶よ、花よと育てあげた胡瓜の生ひ立を申し述べますのでありますからブルジウアの家庭に育つ生ひ立史であります。

此のブルジウアの育て方を私共の方では促成栽培と申すのであります。

促成栽培の設備に依る種類

促成栽培と申ししても百日かかつて成熟すべきものを五十日とか六十日で成熟させると云ふ様な栽培に要する時間短縮を目的とするものではなく、夏に成熟すべき胡瓜を冬に食べる様に栽培す

る方法のことでありまして、文明の進歩につれて食物に對する嗜好向上の結果、珍果、珍菜を求める世の趨勢に依つて案出された方法であります。従つて小脂大の胡瓜一本十六錢位もするのを喜んで買食する次第であります。

さてその方法を大別致しまして二種類とします。

一、冷床

周圍を木材、煉瓦、コンクリート等で圍み上部を油障子、油布、或は硝子障子等で覆つた室を造り單に太陽の光線の力のみの利用でありまして、伊豆とか房州地方の様な暖地に利用されて普通冷床と呼ぶものがこれであります。冷床と申しまして一口に冷笑してはいけません。此の種の床も相當廣く用ひられるのであります。

二温床

地上の裝置は毫も前者と異なつては居りません

が溫度を如へる方法に相違があるのであります。

さうしてその熱源に種々あるので其の熱源の種類に依りまして裝置は違ふ理であります。即ち鐵管を設置しまして蒸氣を通じ、溫泉地では此の水を利用して溫水を通じ、又は煙道を設けて熱氣を通する杯ありますが近代歐洲では電氣力を利用したのもあるさうであります。尙釀熱物を利用する方法もあります。次に稍詳述しやうと思ひますのは此の釀熱物を利用する促成栽培であります。

温床の位置及び構造

温床の位置即ち促成栽培の最も重要な點は寒風を防ぐに充分な場所で日照の充分な位置でありまして、なるべく東西に長いのがよいのであります。がさう理想的の場所のみはありませんが其の際は又それ相應に寒風を防ぎ日照を充分にする様な設備をすればよいのであります。郊外の砂村附近或は中野等に散策なさいました時、藁造りの高い壁

或は澤の鶴、白鷹等と書いた酒樽用の筵で造られた垣を見うけることがおありになりませう。さうした場所の内をのぞきますとそこには短冊形をした多數の框がみられませう。

構造と申しまして特に改めて申す程の事ありませんが形は大體に於て短冊形が用ひられて居ります。その大さは一般に四尺に二間で東西に長く造り、南側は高さ八寸北側は一尺五寸位の框を造ります。その框の上には諸種の硝子が置かれて居ります。近頃硝子障子の代りに「ヒログラス」といふ金網の細目に「セルロイド」様のものを張つたものがあります。これは硝子の様に紫外光線をさへぎることがないので植物の生育上大變都合がよいといはれて居ります。さうして北側を南側よりも高くする理由に太陽光線を充分に受ける様にする目的であります。

又深さ、形等が醸熱材料の種類及び材料の使用

量並に行ふ時の季節等に依りまして大變相違があるものであります。それで各々實驗家は夫々の體験に依りまして最も經濟的に多く收益を擧げる様に努力されて居りますので、的確には申されませんが大體を申し上げますと、床の中央は高く周圍は低く恰も蒲鉾形に造りまして中央の部分で一尺乃至二尺五寸位を普通と致します。

その目的は床内の溫度全部を均等に保たせる爲であります。即ち中央は周圍の發熱材料の爲に溫度は充分保つ事が出來ます理でありますが、周圍は直接外部の土壤に接します爲、溫度は中央部と同量の材料では低下する理になりますから此缺點を補ふために特に周圍は中央より多量の醸熱材料を置く必要を生じますから深く掘るのでありますし、南側は框の爲に日光の直射を受けませんからこの部は特に他の周圍の部分よりも深く掘る必要があります。そして此の床孔の底は充分固くして

おくのであります。

醸熱材料

そこで右に述べました様にして出来上りました柵及び硝子障子並びに床孔を活動させます。材料が醸熱材料であります。その材料の種類が又色々あるのであります。各々一得一失があります爲、地方々々で最も經濟的なものを利用する様であります。がなるべく特殊なものは除きまして極く一般的のものを舉げてみますと

一、馬糞

厩肥は先づ一般に多少なり用ひられて居るものであります。然し温度は高くなる材料であります。が永く続きません爲に單獨には使用しない様であります。と申しますことは、他の醸熱材料と共に混用するといふのであります。この材料は兵舎、特に騎兵或は輜重兵と云つた様な兵舎の附近では多量に得られて便利なものでありませう。

二、鶏糞

これは自家に養鶏等される家庭では利用されて重寶なものであります。高温を發しますが永續させるにはあまり好ましくないさうであります。

三、草木の葉

藁屑は一般に用ひられるものであります。その他乾草、潤葉樹の落葉等であります。櫟の葉は温床を造るに相當重要なものであります。是等はあまり高温は發しません。變化が少なく持続性のあるものであります。から前記のものと併用するには重要なものであります。

四、農産製造の殘搾

米糠、これは高温を出しますが持続しないものであります。から他のものと混用致します。

甘藷粕、千葉縣地方ではこれを多く得られますので利用されることも多いさうであります。高温を發して尙持続性のあるものであるさうであり

ます。

綿屑、是は岡山縣附近では相當多量に使用されて居るもののやうであります。これも高温で持續性のある結構なものでありますが以上は特殊な地方にのみ得られる材料であります。

五、その他

蒲、菜、塵芥等あります。前者は水郷に於て多量に得られ、後者は多く都會附近 求められるものであります。尙人糞尿も必要でありますし其の他種々何でも用ひられるものは多種多様でありませうが要するに安價に求められるもの、高温を持續的に發すること、容積のあまり大きくないこと等がその重要な點でありましてその要件になつて居れば植物に害を與へないものは何でも利用出来る理であります。

そこで胡瓜を作りますにどの位の温度が入用なのかと申しますと約二十三度を普通とされて居り

ます。

踏み込み

以上床孔が出来發熱材料が集まりましたなら、これをどうして發熱させて胡瓜（胡瓜には限りませんが）を作るかといふ問題に逢着するのであります。そこで床孔に發熱材料を入れるといふ仕事をせねばなりません。これを踏み込みと稱するのであります。

先づ孔底には薄く粗大な材料をおきまして排水の便を計るのであります。次に豫て準備しておきました釀熱材料を容れるのでありますが、この作業こそ實に促成栽培の成否の分岐點であるのであります。それは恰も釀造家の仕込み同様のものがあります。酒を造らうとして全部を他の酵素のために烏有に歸せしめるといふ運命を生ずるといつた様な作業なのであります。

そこで釀熱材料は出来得る限り相互に混和させ

る必要があるのです。それには豫め各材料を混合しておいて後孔内に容れるのも便利でありませう。

さうしてこの混合材料を少量宛孔内に投じて好く踏み踏んでは投じまして所要の厚さに達して止めるのであります。(所要の厚さは七寸乃至一尺二寸)この際材料が乾燥して居ります時には稀釋した人糞尿等を少量宛注ぎながら踏み込むのもよいさうであります。踏み込むと申すのは人の足で踏み込むのでありますから一寸こゝで我田引水上胡瓜一本の價格を考へていただく必要はないかと思ひます。

餘談はさておき踏み込みの際注意致しませんと中央は密に孔邊は疎になり勝でありますが是は溫床内の溫度を不均にさせる虞があります。又踏み込みは密にすぎますと孔が深くて狭い場合に起りますやうに溫度は容易に出ませんし疎に失しますと發熱は速でありますして高温になりますすが持続性

がありませんのみならず床面が低落するといふ始末になります。

釀熱物の上部には床一面に膨軟多孔の材料を敷き床熱の分配を平等にします。それには木葉等が目的に叶ひます。

踏み込みが終りましたら二日間は障子をおき日中は日光を通じ、夜間は被覆物において保温しました後、發熱材料の上へ土をおくのでありますがこの土は前以つて造つておく必要のあるものでありまして普通植土と申すものであります。

植土は人工を以つて作物に適するやうに造るものであります。さうして前回の栽培に使用した作物と次回に栽培する作物は交換される必要があるのです。例へば前回茄子に使用した植土は次回は胡瓜に使用するといった具合にするのであります。そこで植土を造る配合の割合は色々ありませうが

風化した肥沃の粘土

五分

細砂土

一分

堆肥

四分

位の割合のものの混合土であります。これを一定の場所でよく腐熟させて混合したものであります。この土を發熱材料の上へ四五寸位の厚さに平におくのであります。

以上述べましたやうに温床を造りますには相當大きな努力を要します。さうしてこの床へ外で造つておいた苗を植ゑ付けましてから後の温床の管理に就きましては不斷の注意と、老練な技術を要するものであります故、ここにぐど／＼申し上げましても無味の上に乾燥の上塗りをする事をおそれますので中止致しますから尙詳細の研究を御希望の方は最後にあげます様な参考書によられますことをお願い致します。

右で促成栽培用の温床に就て大體を述べまし

たそこで胡瓜は何月頃播種したものが正月頃に皆様の食膳に上るかと申しますに、先づ十月中旬であります。温床に定植されますのは十二月上旬のものが正月初め頃から約二十日間位採收出来るのであります。

胡瓜の定植と種類

温床に植ゑられる胡瓜の苗は二三回移植されたもので四五枚の葉を生じたものを定植するのであります。その期間は大凡播種後五十日位を要するのであります。苗を温床に定植致しますには前述の床を造つて五六日間を経た後温度が一定してからであります。温床を造つた直後は床内の温度は一定しないものであります。

胡瓜の種類は節成種がよいのであります。即ち早生であることと矮性のこと、而も優良種で需要の多いものといつた要件を必要と致します。

播種後九十日位で結果しますから朝又は午後に

採收するのであります。

温床内では特に病蟲害に罹り易いものでありますから時に三斗式ボルドー液とか除蟲菊加用石鹼合劑を撒布してやります。

大變粗末な申し上げやうで充分の御理解はないかと考へますが正月頃出て參ります胡瓜が、どんな努力で出来るかは大體おわかりかとも思ひま

す。自ら手を下して促成栽培をしてみやうとお考への方は参考書は色々ありますから（農學博士恩田鐵彌氏、喜田茂一郎氏共著實驗蔬菜不時栽培法東京博文館藏版等）それに依つて充分な智識を得られるなり實地（砂村附近）等についておとり調べになる事を希望致します。

新年にあたりて

年と共に讀者諸君の御高誼を感謝します

日本幼稚園協會一同

兎

土川五郎振

一 私は……………兩手を左へ左足一步前にす。

兎と……………兩手を右へ右足一步前にす。

申すもの……………左足より三步足を揃へると同時に禮をなす。

顔や……………右足一步後ろへ右向をなし兩手を兩側より顔の前に掌を向き合せ丸を作る。

からだの……………左足一步後ろへ左向き前と同じく兩手を體前にて大きく丸を作る。

小さい……………兩手を胸に兎となりて蹲踞す。

わりに……………直立す。

耳の……………右肘を曲げ右掌を右耳に近く向けて前膊を立て後斜右上方に伸ばす。

長いのが……………右手を其まゝにして左肘をまげ左掌を左耳の方に向けて前膊を立て更に之れ

を斜左上方に伸ばす。

何より自慢……………兩手を真直に上にあげてそれを左右に振りつゝ後退す。

皆さん……………右手を左前に招くごとくす。

よく見て……………左手を右前にて招くことくす。

下さいな……………禮をなす。

二 藝は……………は兩手を左方へ右足をあげ左足にてとぶ。

これとて……………兩手を右方へ左足をあげ右足にてとぶ。

ないけれど……………兩掌を體前にて向き合せて左右と振りつゝ足踏みをなす。

前脚短く……………兩手を下方より兩側左右を通してあげ兩肘を曲げて兩前膊を立て掌を前に向

け肩の前におく。

あと足……………右足右へ右手を右上、左手を左下に左足を左下方に伸ばし。

長く……………目を左足に注ぎつゝ二回跳ぶ。

とんてはねるのが……………正面を向きたるまゝ兩手を胸に兎となりてとぶこと二回。

誰より……………跳んで左足一步前兩手を左下方に流し右上を見る。

上手……………跳んで右足一步前兩手を右下方に流して左上を見る。

みなさん……………二回拍手す。

はやして……………兩手を斜左右下方に開く。

くださいな……………禮をなす。

兎

♩=88

一 ワ タ シ ハ ウ サ ゲ ト マ ウ ス モ ノ
二 げ い は こ れ と て な い け れ ど

カ ホ ヤ カ ラ ダ ノ ナ ヒ サ イ ワ リ ム
まへ あ し み じ か く あ と あ し な が く

ミ ノ ナ ガ イ ノ ガ ナ ム ロ リ ジ マ ン
と ん で は ね る の が だ れ よ も じ ゅ う か

ミ ナ サ ン ヨ ク ミ ラ ク ダ サ イ ナ
み な さ ん は や し て く だ さ い な

兎

一、私は兎と申すもの

顔やかからだの小さいわりに

耳の長いのが何より自慢

皆さんよく見て下さいな。

二、藝はこれとてないけれど

前脚短くあと足長く

とんではねるのが誰より上手

みなさんはやしてくださいな。

パンを焦した王様

金子彦二郎

昔むかし、イギリスといふ國にアルフレッドといふ勇ましい王様がいらつしやいました。

まだ世の中が騒がしい頃の事なので、王様お自ら銀の鞍をおいた白いお馬に跨つて、あちらこちら悪者どもをイギリスの國から追拂ふ爲に出かけていらつしやいました。デンマーク人を追拂ひに出かけた或日のこと、どうした拍子か、王様の方の軍のはかりごとに手違ひが起つたため、誠に見るもあはれな負け軍となつて、澤山の家來どもは、あわてゝどこかへ逃げ落ちてしまひ、王様も頼みに思ふ馬は傷ついて斃れてしまふといふ有様なので、ほんとに命からがら、すっかり身なりを

おかへになつて、はふぐの體で、足のつゞく限り森の深い山の中へと逃げこんでしまひました。

風にさゝやく薄の穂にも、もしや伏兵が居たのではないかとびつくりしたり、お自分の足音にさへ追手の武者かと肝を冷して振り向いたりしながらやつと森の茂みの中に休らふべき場所を見出で、ほつと安堵の息をつきました。今日の戰場からどれ位離れたところか、王様にはわかりませんでしたが、少し落ちついてから、王様はあたりの様子を眺めながら、細い低い聲でこんな獨言をしていらつしやいました。

おお。こゝは一體どこの何といふ處か知らな

いが、いやどうも目に映るもの、耳に訪づれるものゝ凡てが、如何にも世ばなれのしたひつそり閑とした處ぢやわい。川は黙りこくつて流れてゐる。その清い川水がぐるりとこの邊を取圍んでゐてくれるかへ。朕も安心ぢや。それから十重二十重に絡み合つてゐる叢林は、又丁度鐵條網のやうによく朕の身を守つてゐてくれる。

いかな鬼のやうなデンマーク人でもまさかこんな奥深い隠れがまでは目が届くまい。こゝならもう大丈夫、敵の追手などに見出される氣遣なしぢや。だが併し、やはり此の近所に百姓家の一軒もあつてくれなくちや困るな。さうでないと、やつと敵の白刃の下は逃れたものゝ、今度は空腹といふ大敵の爲にいちめ殺されねばならぬ。あゝあ、この世に神様も佛様もいらつしやらないのかしら。どうしたらよからう。……おや／＼、氣のせい、其の邊に人家でもあ

りさうな。その叢に人の通路らしいものがついてゐるやうだ。さうしてどうやらあちらの方に薄白く立のぼる煙らしいものも見えるだ。いつまでこゝにかうして居たからつて、仕方もない。どりやもう少しその邊をぶらついて見るとしよう。

かう言つて、王様は疲れた重い／＼足をさすりながら立上つて歩き出しました。

二

氣のせいかと思ひながらも辿つて住つたのは、紛れもない人の行き交ふ道でありました。だんだんとたづねて行つた行手には、水車小屋かとも思はれるやうな見すばらしい一軒家がありました。

「やれうれしや」とたどりつくすぐ手前で、人の好さうな老人に出會ひました。王様は丁寧にお辭儀をして、

「もしお爺さん、甚だだしぬけに失禮な御無心

ながら、山路に迷うて困りあぐねてゐる獵師ですが、どうぞお前さんの家へ一晚泊めてやつて下さいな。」

「何ですつて？ 泊めてくれつて？ いやこの頃のお客が多いにや呆れてしまふ。来る人々皆一々さうもてなしてゐては、身上も寵もたまつたものぢやねえや。だがまあともかくお入りなせえ。家内と相談したらどうにかなるべえ。」かういつて先に立つて薄暗い穴藏のやうな家に入つて往つた。お爺さんは、

「おい、これ、今戻つたよ。今日は一日中煙草一服吸はずに木を樵つたもんだから、いやもうお腹はへとくになるし、疲れてぐたぐたになるし……。」

と、かういひながら、内儀さんに話しかけました。が内儀さんはお爺さんの方も振り向うとせず、

「これく、お前さんといふ人は、いつもく夕飯ばかり急ぎ立てなさるが、生憎と今日はまだ出来たちませんよ。パンがおいしく焼けるまでにはかれこれもう小一時間もかゝるし……だつてお前さん、またお天道様が裏の木小屋のうしろへ左様ならもしないんだもの……」

と言ひながら、まだ誰かがゐるやうな人の氣配にひよいと入口の方を見返ると、そこに見知らない人影があるので、

「そりやさうと、又、誰かを引つ張つて來たね。」

といふ。かう言はれて、少々出後れ氣味の王様はお爺さんの紹介するのも待たないで、

「いや、お母さん？ これはくお初にお目もじ致します。朕は他國の者だが無駄ながら、暫く此所に休息させて戴きたいね。それから誠に申兼ねるが、お情けで一飯振舞つていただきた

いもんで……。

と言ひました。内儀さんは一寸ふくれて見せて、

「いやだねえ、此の人は、お母さんなんて言つてさ。憚り様ながら、斯う見えても、まだ子供を生んだ覚えはないのですよ。『お内儀さん、どうぞ御無心！』とかう言ひ直しなさい。すなはにさう言ひや、うんと待遇してやりますよ。だが待つた／＼、お前さんは今他國者だといつたね、私は他國者の世話はしないことにしてゐるんだよ。なにも他國者なんか目をかけてやるいはれが無いからさ。あの獸のやうな他國の奴ばらが入り込んで來てからといふものは、このイギリスの國には、一日だつてゆつたりと遊び樂める日がなくなつてしまつたんだもの。」「いやこれはあやまつた／＼。この土地の人達とは全く見知りのない他國者だといつたので、憚りながら朕だつて生えぬきのイギリスツ子な

んだよ。」

かう改めて言ひ直すと、百姓は膝を乗り出して、

「それぢやお前さんもやつぱり、あの私達の村をやき、家畜や穀物をひつたくるあの沒義道なデンマーク人が悪くて堪らない仲間かね。」

と言ふ。すると王様は急に顔をあげてひどく興奮して、

「憎いの、憎くないのどころか。實以て憎みてもなほ餘りある犬畜生とはあのデンマーク人のことよ。」

と如何にも憎々しげに言ひ放つたので、この只ならぬ氣色を見まもつてゐた内儀さんは、お爺さんの方を顧みて、

「これお前さんや、あの人は本氣で憤慨してゐるんでせうかね。何だかあんまり芝居じみてゐて、ちと變だはねえ。」

と言ひ終るのを待たずに、疑られたのが残念で堪

らないといふやうに、王様は目をいからせて内儀さんの顔をにらみつけて、

「何だど。もう一度言つて見よ。かりにもこの朕の言葉を疑ふなどいふ無禮なことをぬかすと其の分にはさし措かんぞ。」

といきまいて怒鳴りつけました。

この見幕にすつかり疑ひの雲を晴らしたお爺さんは、王様をなだめるやうに

「いや、心底しかと見届けました。お前さんはたしかに生粹のイギリスつ子に違ひない。さあ握手をしませう。」

といつて近寄りながら、後を振り返つて、

「これくちと氣をつけて口を利くもんだ。こんな真正正銘な愛國者を見損ふなんて、罰があたるぞ。」

と言つたので、さきに路に迷うた獵師だといつはつてゐた王様は、更にこんなことを言ひました。

「實はな、かう見えても朕はアルフレッド大王様のお供をして最後まで踏留つて奮戦した者だよ。」

「ひえつつ！お前さんは、あの、國王様と御一緒に……あゝ、神よ、我等の尊崇する國王様の上に輝ける武運を授け給へ……そりやさうと誠に心もとないのは、あのお情深い我等の國王様の御身の上だ。其の後の御模様はどんな工合でせうか、早くさかせて下さい。」

「それちや、本當にお前達も國王様にお最負申し上げてゐるのか。」

「お前達も……とは、へん、面白くねえ。貧しい暮しこそしては居りますが、それでも心のありつたけを捧げて國王様をお慕ひ申してゐるんですよ。だから毎晩く豺や狼のやうなデムマークの奴原を一人餘さず討ち取つて下さるやうにと、夜の目も寝ずにお祈りをしてゐるんです。」

よ。それなのに、噂によれば、どうやら今度の戦は不首尾らしいとかで、ほんとに氣が氣で無えんですよ。」

「中々熱心な國王様最負だな。國王様がお聞きになつたらさぞお喜びであらうよ。」

「そんなことはどうでもいいが、國王様の御行先きは？」

「いやもう散々なことで。世間の取沙汰ぢや何でもその國王様は戦死なされたらしいとか。」

「ええつ！御戦死!!! あゝ、世は闇ぢや。神様はどうなすつたんだらう……まあくとにかく、

もつとこつちへ來なせえ。黒バンでも御馳走しませう。空腹かゝへたお前さんにや、香物も刺身ぐらゐにおいしからうから。」

かういつて親切に奥へ導き入れると内儀さんも言葉をかけて、

「さあ、遠慮は無用、お前さんもつとこつちへ

來なさるがい。國王様なみに歓迎してあげますよ。」

かういつた内儀さんは、お爺さんに賛成を求めるやうなそぶりをしながら、かういひました。

「ちよいと、お前さんや、私どもはかうして此のお客さんを出來るだけでもなしてあげるからお客さんの方も少しは自分の食ひ扶持のつもりで少しは働いてくれないと思ふはね。見れば體格も立派な上にどうやら如何にも器用さうにも見えるから。」

「うむ、さうともく。」

とうなづいて見せたお爺さんは、王様の方を向いて、

「時に客人、お前さんの得意藝は何かね。」

と問ひかけました。生れてから仕事らしい仕事といふものを教はつたこともなければ、させられた事もない王様は、この突然な質問にすつかり面喰

ひましたが、併しさりげなき體にもてなして、

「うむ、これは抜かつてゐた。朕にさせてよいことがあるなら、何でも喜んで手傳ひませうよ、バン代だけの仕事を承つておくと朕も大いに氣安くてよいことだ。」

と答へました、

三

「はて、何仕事がよからうかね。背戸へ出て粗朶でも一つ奇麗に結はへて貰ふかね。」

「まことにお恥しい話だが、其の粗朶しばらくといふ事だけは、生れてからやつて見たことがないんで。」

「ちや屋根を貰いて貰はうかね。この間の嵐で牛小屋の屋根が少し吹き捲られてあるんだが……。」

「残念ながら、そいつもどうも……。」

そこへ内儀さんが口を挟んで、夫に耳うちして、

「それぢやどうだねお前さん、お客さんに『燈心草で籠が編めるか』つて、聞いてごらんな。

丁度籠が無くて困つてゐる處なんだから。」

この私語をきつけた王様は、益々當惑らしい顔をして、

「そいつも、一向やつたことが無いんで……。」

と言ひ苦くさうに斷る。とお爺さんは

「では、乾草を鶏に積むことは？」

「いや、それも……。」

何一つ引きうけようとなし其の返答にちと腹立ち氣味になつたお爺さんは、最後に嘲るやうに、

「いや、何といふ呆れた能なし猿なんだらう。」

見れば人並に五本指の揃つた、而も大きな二本の手を持つてはゐるやうだが……これこれ、何か臺所仕事でもさせてやりな。いくら何でも火を焚ことや、調理臺の上を磨く事ぐらゐは出来るだらうから。」

「さうね。それぢや此の焼きかけの食パンを見て居て貰ひませうかね。私は一寸牛の乳を搾りに出て來なければならぬから。」

「それがよからう。どりや俺も粗朶でも束ねて來よう。まだ夕飯にもちと間もあるやうだから。」

老爺さんから知慧をつけられた内儀さんは、

「これお客様、よく番をしてゐて下さいよ。パンを黒焦げにしちやいけねえだよ。焦げねえうちにちよい／＼反してね。」

と言ひつけました。王様が、これは斷ることも出來ませんから、

「お指圖萬々承知しました。」

と答へると、内儀さんもお爺さんも戸外へ出て行きました。

四

後には王様唯一人、移れば變る世の習とはいひ

ながら、餘りの我が身の現在のあさましさに、心は千々に思ひ亂れてゐるので、あんなにこま／＼と注意されたパン焼のこともすつかり忘れてしまつて、うちうなだれた頭は、動かうともしない。幾たびか深い長い溜息をついてから、こんなひとり言をしてゐるのでした。

——あ——あ、朕一人に降りかゝつた不幸なら、そりやどんなにも我慢が出來よう。だがこの大英國の土をば朱の血に塗まみれさせてゐることを思ふと、あまりの濟まなさから、朕の身も心も一寸だめし五分だめしに逢つてゐるやうに辛い。戰場には朕の爲に命を投げ出してくれた忠實勇敢な將卒の屍散らばつてゐて目もあてられない光景が描き出されゐる。あゝそれからあはれな人民たちは、或は虐殺の苦を受け、或は溫かい家庭から驅り出され、或は虎の子のやうにしてゐた財物を奪はれて生きてゐる望みを

失つて、たゞうろ／＼とあわて惑うてゐる。其の悲惨な有様を現に目の前に見てゐながら、天帝の思召を承つて君臨してゐる朕として、それらを塗炭水火の苦みの中から救ひ出すこともな

この時、入口から入つて來た内儀さんは、後の老爺さんを省みて、

らず、見す／＼見殺しにしてゐるとは、何といふ腑甲斐のないことであらう。おゝ、天に在します神よ、もしも微力な朕に、あの残忍兇惡なデンマーク人の爪牙のもとから、この大英國を

「ちよいと、お前さんや。手を貸しておくんないよ、今牛乳桶を卸すから。や、どつこいしよ、此の搾り立ての牛乳と、あの焼き立てのパンさへありや、百味の飲食よりおいしい御飯が戴けるんよ。」

救ひ出すだけの器量がございませんならば、朕の代りに、もつと／＼雄才大略のある豪傑をこの世にお降し下さい。さうして意氣地なしの朕

と言ひながら、爐の方を見るや否や、頓狂な聲を出して、

のやうな者は一生この浮世離れた山の中の堀立小屋の中で、奴僕としてこき使はれさせて下さい。此の大英國の運さへ開けていくならば、

「やつ！南無三寶、いやに燻ぶると思つたら、折角のパンが燃えてしまつて、靴の皮のやうに眞黒けぢやねえか。一度も反さなかつたんだね此の馬鹿野郎！案山子奴、抜作めが……。」

朕は肥料汲みでも、犬殺しでも喜んで致します………おやつ！樸訥な亭主と内儀さんが歸つて

と、頭の上でが／＼怒鳴りつけられて、ハツと我に返つた王様は、此の時やつとパン焼をいひつかつてゐたことに氣がつき、どきまぎして

來たやうだぞ。」

「や、やつ！これは御内儀、申譯次第もござら

ぬ。あまり躬の不仕合せ臍甲斐なさにくよくよく思ひ入つてゐた爲に、折角のお依頼もつい打ち忘れて……」

と、ひたすら低頭平身して詫び入つてゐるしをらしさに、諦めの好いお爺さんの方は、もう何もかも忘れたやうな調子で、内儀さんに向つて、

「おい／＼、何だねその膨れ面は、餌でも食べ損ねた河豚ふぐがなんぞのやうに、見つともねえからもう止さんか。それ位のことなんか、糟も残さず燃えて仕舞つたパンのやうに煙にして忘れつちまへ。客人はきつと嬉しい懐かしい思ひ出に耽つてゐて忘れちまつたのに違ひねえよ。ついなひだお前にだつてあつた事ぢやねえか、勘忍は無事長久の基、怒りは敵と思へぢや、さあ／＼機嫌を直した／＼。」

「これ／＼お前さん、何をさう一人でべら／＼御詫を並べてゐるんだね。もういゝ加減にお止

しなせえよ、ほんに男つてものは仕方のねえものだ。」

かういつてやつと機嫌を直した内儀さんは、

「出来たことは仕方がねえ。牛乳の方でも澤山呑んで腹を塞げるだ。まあとにかく夕飯にしよう。」

といつて用意を整へる。餓ゑた口にまづいものなし。王はやつと蘇生つたやうな思ひをしてかういつた。

「いや、どうも、この見た／＼でも氣持のよい搾り立ての牛乳のお蔭で、焦げたパンの味さへも格別。」

といつて寝めると、いゝ氣なお爺さんは、

「さあ／＼、客人、どうぞ遠慮なしにどし／＼取込んでおくんなせえ。」

といつてから、内儀さんの方を顧みて小聲に「それはさうと、お客様は、どこの間にお寝か

せするかな。」

と言ふと、もう機嫌の直つた内儀さんは笑ひ崩れて、

「ホホ……『とこの間』とは好く出来たね。居間とも寢室とも、たつた一つしか間を持たない癖に。だが裏の納屋には新しい藁があるから、あの上にも……」

と言つた。今は何事にも不足を言ふまいと決心してゐた王様も『納屋の藁の上に』と聞いて、今更ながら身の不遇を歎じ、誰にいふともなく小聲に「國王らしい寢床でなくても、せめて兵卒らしい寢床に寝たいな。……いや／＼こんなことは思ふだけでも相濟まぬ。朕につき従つてゐた數多の將卒たちは野天の下に、露の臥床に暖い夢さへ結びかねてゐるだらうのに……」

五

王様がこんなことを考へながら、黙りこくつて

ゐる時、戸外では何事が起つたのか、この閑静な森の中に、人や馬のさわめきらしいものが聞えて来る。早速それを聞きつけた内儀さんは、お爺さんに、

「何でせう、今頃ざわ／＼物騒しい音がしますね。あゝ分つた。ありやたしかに馬の蹄の音だ、もし、お前さんや、何事がおつばじまつたのか一寸様子を見て来ておくれよ。」

聲に應じてお爺さんがあたりの小屋を見廻りに出掛けていつたが、やがて立戻つて來た時には、其のうしろに拔身を提げた嚴めしい軍人を従へてゐた、するとてつきりそれがあの慘虐なデンマークの兵隊に違ひないと思ひ込んだ内儀さんはもうがた／＼ふるひをしながら。

「ひやつ！拔身々々」

と言つて震ひ上つてゐる。お爺さんも、

「デ、デンマークの兵隊様々々、どうぞ命ばかり

はお助け……」

と顔色をかへてひたすらに頼み入れてゐる。が、そんな泣き言には耳も藉さず目もくれなかつた件の軍人は、この家の中に入つて来て、ふとそこになだれてゐたバン焼の番さへ出来ない能無しの馬鹿野郎の姿を認めるや否や、ハツと其の人の足許に跪いて、

「アツ、陛下よ、國王様よ大王様よ、さてはかやうないぶせき處にお忍びでござりましたか。

でもまあ御無事で……」

と涙を流して歎びの言葉を投げるのであつた。

この思ひがけない外來者の喜びの叫びでふと頭をあげた王様は、地獄で佛に逢つた亡者の心もかくやと思はれる許りの表情を顔に湛へ、その軍人の肩に手を載せて、

「お、誰かと思つたら、忠勇無双なエルラか、よくも尋ね當てゝくれた。嬉しく思ふぞ。」

と答へたのであつた。これこそ王様の侍従、武官のエルラであつたのだ。

「お、陛下よ、小臣はお目出度いお便りを聞え上げに參りました。」

「なに？ 目出度い便り？」

「其のお驚きは御尤もでございます。實はあのキンウイス城塞に包圍されてゐた我軍が、最後の非常手段として死物狂の突撃を敢行したのでござります。所で、邪は遂に正には勝つことが出來ず、デンマーク軍はこの決死隊の爲に滅茶くんに斬りまくられまして、さしも暴戾を極めた敵軍もあの廣い野邊の緑を朱に染めて全滅の體たらく……」

「ホホウ、エルラよ、そりや一體眞實か。」

「決して御懸念には及びませぬ。デンマーク軍の中心目標である軍旗さへ奪ひ取りましてござります。今や敵軍はすつかり度肝を抜かれて

再び抵抗ふ氣勢もござりませぬ。凱歌をあげた我がイギリス軍は滿腔の誠意と喜びとを以て陛下の御歸還を待ちあぐねて居ります。詳しいことは此の書而で。」

といつて恭しく書面を捧呈しました。

六

さつきからこの問答を聞いて、七面鳥のやうに顔色を換へ、身の置き處もないやうにおどおどしてゐた老爺さんは誰にいふとなく、

「や、や、これや飛んでもねえことになつたぞ……これ噂よ、手前はまあ取返しのかねえ惡口を叩いてしまやがつたぞ。」

と怨めしげに言ひかけました。かう言はれぬさきから、もう身も世もなくぶる／＼振ひつゞけてゐた内儀さんは、泣聲出して、

「あゝ、これお前さんや、どうしませう。私等はどう絞首にきまつた。だが驚いたね。あれ

が國王様でいらつしやらうとは……」

「なあ、噂よ、あの俺等のやうな下司のするやうな仕事のどれ一つも出来ねえと聞いたとき、直ぐ國王様と感づける筈であつたになア。今更仕方がねえが……」

この時王様はすつくと立上つて、

「誠に目出度いしらせであるぞ。輝ける希望が絶望の淵のどん底から飛び出して來たのだ。よし！ 朕は金の鎧に身を固め、白馬に跨つて、我が勇敢なイギリス軍の先頭に立つて戦ひ、我が軍に最後の勝利の榮冠を贏ち得させずには措かぬぞ！」

「嬉しき仰せを承りまする。もはや此の世に在さぬとまで傳へられた陛下が、再び起つて武裝を召されたと聞きましたら、あちらこちらに身をひそめて居ります武人どもが、西から東から群つて來て、以前にも増した氣勢をあげうる

ことは必定にござりまする。」

「一刻も早くそれらの者共に逢ひたいことぢやさうして戦場の露と消えた多くの臣下の爲に弔合戦をしなくては……。」

この時、お爺さんと内儀さんとは、王様の足許にひれ伏して、

おゝ我が國王様よ！

あゝ我が陛下よ！

「どうぞ、お情けある御處刑を！」

「陛下が、俺の家内の惡口雜言をお許し下されさへすれば、もう何も思ひおくことはございません。かはいさうに、彼女は別段わる氣があつて申した譯ぢやございませんですから。」と口々に泣きわめきながら、お詫びしましたが、そこは苦勞人で情深い王様のことでですから、やさしいおだやかな口調で、

「心配するな、殊勝な者共。許してつかはすば

かりか、朕の方からお禮を言ふぞよ。そちたちは、朕の最も困つてゐる處を助けてくれた、謂はゞ命の親である。朕が再び此のイギリスの王位に即く時が來たなら、よくもこの朕をもてなしてくれたそちたちの好意に對して、厚く褒美の品を取らせるであらうぞ。」

と、忝くも有難いお言葉を賜つてから、

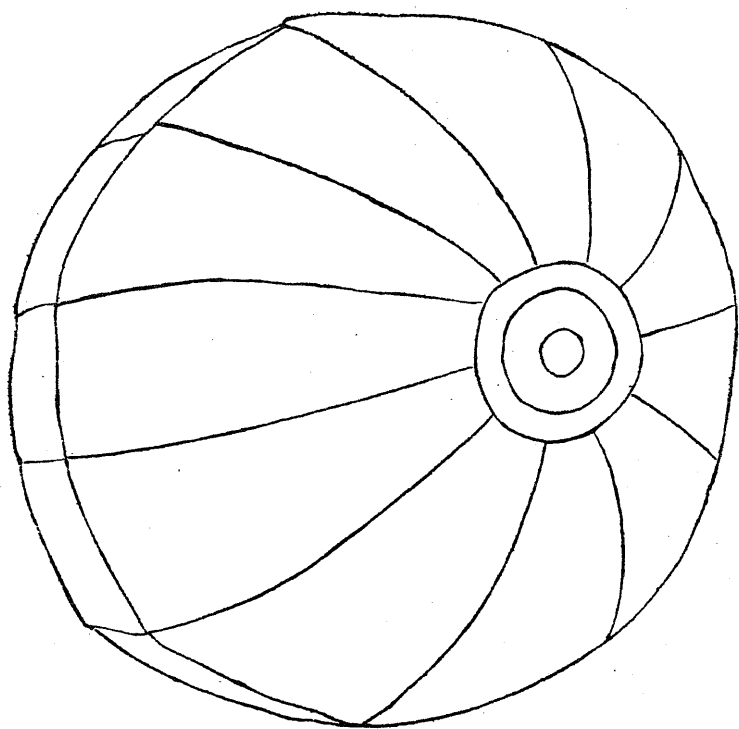
「いざ、忠勇無双なエルラよ、さらば出陣の用意！」

と武者振り勇しく、この伏屋から御出發になりましたとさ。



ふりね

【船風紙】



白帆が走る

柿谷華天子

お日様出たよ

今日はよい天気

白帆が走る

一つ二つ三つ

スースと走る

青い青い海を

でど虫の様に

白帆がはしる。

創作
童話 『いてふのおうち』

中 村 楠 雄

百合子さんと鐵夫さんとは兄妹です。兄さんの鐵夫さんは、もう學校へ行つていらつしやいます。百合子さんはまだ幼稚園へ行つていらつしやいます。

お空が高くく澄みきつて、お日様がボカくと照る、暖かい或る日曜日の事でありました。大變氣持ちがよいので、百合子さんと鐵夫さんとはお晝からおうちの裏のお庭で、飯事を始めました。大變面白くお遊びをして居りましたが、鐵夫さんは何時の間にか長い竹の棒で、いてふの葉をたき落しく、お靴で踏みにちりくして面白がつて居りました。百合子さんも御馳走のお草を取り

に行つたのですけれど、また何時の間にか、いてふの葉を、一生懸命に拾つてゐました。

其の時にね、百合子さんは何だかブツくと、一人ごとを言つてゐました。よく聞いて見るとそれはこうでした。

「いてふちやん、お顔の色惡るいのね、黄色ね」

「いてふちやん、どこわるいの」

「いてふちやん、おなかすいたの」

「いてふちやん、木から落ちて痛い」

「いてふちやん、晩に一人でこはい！」

「そしたらね、あたしのおうちへ、つれて行つてあげてよ」

「あのね、あたしのお人形さんのね、お蒲團借りてあげませうよ」

そんな事を言つてゐる中に、百合子さんのお手々に、いてふの葉が一つばいにたまりました。

百合子さんは其のいてふの葉を、大切に持つて歸つて來ました。そして百合子さんが三越へ行つた時、お母さんに買つて頂いた、あの赤い、可愛い、百合子さんの一番好きなお箱の中へ、ねんねをさせてあげる事に致しました。

百合子さんは、其のお箱の中へは一番始めにお人形さんの、お蒲團を敷きました。その上へいてふの葉さん達を綺麗にならべておねんねをさせました。復其の上へお人形さんのお蒲團をかけてあげました。

それから

「いてふちやん、おやすみ」

と言ひながら、お箱の蓋を致しました。

そして夜になつて、百合子さんのおねんねする時間になりました。おねんねする前に、百合子さんは、もう一度あの赤いお箱の蓋をとつて見ました。するとどうでせう。いてふちやん達は、百合子さんにおねんねさせて頂いた通りに、綺麗にお並びして、御無理を言はずに、おやすみして居りました。

「いてふちやん、おねんねしてゐるの、百合子さんもこれからおねんねするのよ。……おやすみ、また明日ね」

さう言つてから、百合子さんはお箱の蓋を致しました。そして其のいてふさんのおねんねしてゐる赤いお箱を、枕もとへ置いておやすみ致しました。

しばらくたつてから、百合子さんのお母さんがお手々へお饅頭をいくつもせて、百合子さんのお部屋へ這入つてくれました。

「百合子さん、百合子さん」

とおつしやいましたが、もうちつともお返事がありませんでした。

「おや、百合子さんはもうねむつてしまつたのねいゝ子だからお早いこと」

「おやく、百合子さんは枕もとへ、こんなお箱を置いて……何が這入つてゐるのでせう」

とおつしやりながら、蓋をスウツとおとりになりました。

「マア、いてふさんをおねんねさせてゐるのですね。それではわたしも此のいてふさんのおそばへお饅頭を入れて置きませう。百合子さんが今日は御機嫌よくお遊びしましたこれ御褒美よ」

とおつしやつて、元の通りにお蓋をして、またあちらのお部屋へいつておしまひになりました。

夜中頃になつて、

「百合子さん、百合子さん」

といつて呼び起す方があります。百合子さんはふとお眼々をあけて見ますと、枕もとに黄色いおべゝを着た、可愛い、お人形の様なお姫様がたつてゐられます」

「ハイ、あなただーれ」
と申しますと、

「わたしね、あのいてふさんよ。お晝間大變可愛がつて下さつたので、お禮に來ましたの。そしてね、うちのお父さんもお母さんも、百合子さんに來て頂きなさいつて、言つていたわ。行きませうよ。そして皆さんと面白い事をして、お遊びませう。わたしのうちそれは面白いのよ。ね、いゝでせう。早く――」
と申します。

それで百合子さんは、いてふさんとおれだつていてふさんのおうちの方へ行きました。町を通つて、田圃を通つて、お山の方へかゝりました。す

るといてふさんは、

「百合子さん、わたしのおうちあそこよ」

と申します。といてふさんの指さす方を見ますと大きなく、高いく、いてふの木が、百合子さんに数へられない位澤山たつてゐました。

百合子さんと、いてふさんとは、間もなく其のいてふさんの林に着きました。見ると其の脊の高いいてふの木の下に、百合子さんとつれだつて來た、いてふさんと同じ様な黄色いおべとをきた、可愛いいてふさんの子供達が、澤山お遊びをして居りました。そしてお風が吹く度に、いてふさんのお子達が皆んな一度に飛びたつて、ヒラ／＼と舞つてお遊戯をする有様は、何ともお口でいえない位ひ美事でありました。

そんな間を通つて、すん／＼向ふへ行きますとピカピカと光つた金色の御門が、見え始めました。「百合子さん、あれわたしのおうちよ」

と、いてふさんが、おつしやいます。

其のうちに其の美くしい御門について、また御玄關まで來ました。見るといてふさんの御うちもピカ／＼光つた金色の綺麗なく御うちでありました。そしてお玄關へはもういてふさんもお父さんも、お母さんも其のほか家内中の方々が皆んなお迎へに出て居られました。

お父さんが

「百合子さん、よく來てくれましたね」

お母さんも

「百合子さん、本當によく來て下さいましたこと」
とおつしやいますと、他のいてふさんの兄弟方も

「百合子さんだ、百合子さんだ」
といつて大喜びをして居ります。

それからずつと奥のお部屋へ參りますと、

「さあ、どうぞ」

といつて、百合子さんをお床間の前の、可愛いり

つばなお座ぶとんの上へ座らせました。それからまたいてふさんのお父さんとお母さんから、

「百合子さん、今日はうちの子供達を、大變可愛がつて下さつて本當に有り難う御座いました」

といつて御禮を申しました。そして

「百合子さんに御馳走をいたしませう」

と申しますと、大勢のいてふさんの御子達は

「ハイ」

と御返事をして、あちらへ行たつかと思ふと、しばらくして皆んなお膳のやうなものを捧げて、またこちらへ來ました。そしてそれを皆んな百合子さんの前へならべてしまふと、いてふさんのお父さんは

「さあ、めしあがつて下さい」

と申します。と百合子さんは、

「いただきます」

といつて、色々のおいしい御馳走を、澤山いたゞ

きました。それで百合子さんのおなが、一つばいになりましたので、

「有りがたうございました」

と申しました。さうするといてふさんのお母さんが、

「それでは百合子さん、まだゆつくりお遊びして下さいね」

と申されました。いてふさんの子達はみんなく

「百合子さんお遊び致しませう」

「百合子さんお遊戯教へて頂戴」

などと申します。それで百合子さんは、いてふさんの子供達と色々面白いことをして、長い間お遊び致しました。

其の時百合子さんは、

「アツ、わたし、本當に長い事お遊びしたわ。父さんやお母さんが御心配になつてゐるかも知ぬ。ああッわたし歸りませう」

と思ひました。

そしていてふさん達に

「わたしもう歸ります」

と申しました。さうするといてふさんのお父さん
と、お母さんは、

「それではまた來て下さいね、これお土産あげま
せう」と言つて、お饅頭を澤山下さいました。そ
れを頂戴して大勢のいてふさん達に御門まで送つ
て貰つて、それから一人ですん／＼、おうちへ歸
つて參りました。

おうちへ着いてお父さやお母さんに、

「只今歸りました」

をして、それからいてふさんのおうちへ行つたお
話をしました。そして貰つて來たお饅頭を、百合
子さんの好きな、あの赤いお箱へ入れました。其
時、

「百合子さん／＼」

「百合さん早く起きませうね」

と云ふお母さんのお聲が聞えました。ハッと氣
がついて見ると、百合子さんはまだおねまの中に
ありました。そして硝子戸へお日様が照つて、雀
はチュン／＼と鳴いて居りました。

それで百合子さんは

「あれッ、夢かしら、本當にいてふさんの所へ行
つて、お饅頭を頂いて來たやうに思つたけれど」
と思ひました。そしてまた

「あッ、昨日のいてふさんが、おねんねしてゐる
か知ら」

と思つて赤いお箱の蓋をスウツととると、中に
お饅頭がいくつも這入つて居りました。

百合子さんはびつくりした様に、飛びあがつて
「本當よ／＼」

と叫んで大喜びを致しました。

(大正二五、十一、二七)

おもちゃ屋遊び

(口繪の説明)

附屬幼稚園山の組

一學期に一度はきつとする試みでございます。今學期は去る十一月の廿七日にいたしました。始めから終りまで五人の保育實習科生(山の組受持)の發議發案でありました。

用意は凡そ、一ヶ月程前からいたしました。品物の中の或る物は作業として、又或るものは自由遊びの時に有志の子供達が寄り集つて拵へたものでございます。今回は、提灯、かぶと、劍、箱人形、紙人れ、帳面、汽車(きびがら)燈台(きびがら)くさり、等でございました。數は、全園児に一つずつ行き渡る様、何れも百個以上拵へました。

前日にはお室の大體の裝飾が出来、全園の各組にポスターが配られましたが、山の組は云ふまでもなく、園全體何となく浮き立つてゐる様に感じられました。

いよいよの當日には、組の子供はみんないつもより早く登園いたしました。店も整へられ、店員も定められて、定刻の十時にならうとする頃には全園の子供は潮の様に推し寄せて来て、實社會以上の混雜さを呈しました。「満員ですから一寸お待ち下さい」と云つて、入口を遮つた事が二三たびに止りませんでした。

子供達は入口からは入ると先づ銀行屋さんへ行

つてお店の數だけのお金(厚紙の打抜き)を、貰ふのです、そしてそのお金でもつて、何でも好きなものを求める様にしたのでした。我れ關せず焉といふ態度をしてゐる番頭さんや、夜店の競賣そつくりの呼聲を出して客を呼び集めてゐる番頭さんもありました。が何と云つても呼聲の大きいお店が繁昌してゐる様でした。紙入れや箱を買ひ、表からも裏からも眺めて嬉しそうにしてゐる女の兒や、買ふと直ぐにかぶとをかぶり劔を抜いて、やつとかけ聲かけて向き合つてゐる男の兒の様子實に面白く、すかさずカメラにと思つてヒント等合せてゐる中、そのポーズが崩れてしまふのはいかにも残念でした。口繪の寫眞はこの時の光景でございます。

後で聞けば、どこの組の孩も「山の組のおもちや屋、もう始まるんぢやない？」と云つて、ろく／＼落ちついてお仕事が出来なかつたそうでござい

ざいますし、山の組の孩の中で「今日はどうしたつて休むのはいや」と頑張つて、のどにシツプをしたり、含漱薬を携へたりまでして出席したのが二三人ございました。又たまにしか見えないお母様が、時でもないのに婆やまで連れて來ての話を、子供が今日はどうしても、お母様も、婆やも來て見て頂戴と申しましたので、どんな催しがあるのかと存じて伺ひましたといふ方も一二組ございました。

さ程にも思へないこうした催しが、この子供達にはどんなに／＼嬉しく待遠く思はれてゐるのであらうと、今更の様に感じられました。

雜 錄

名古屋市に於ける愛護デー

概況

名古屋市保育會

全國幼稚園關係者大會の決議に基き名古屋市で催した愛護デーの概況を御報告申し上げます。最初は色々計畫を持ち、保育會の事業が少しでも社會事業として貢献出来るやうにと思ひましたが實際やつて見やうとすると、第一、當事者が微力なのと經費の上にも行づまりが出来たりして、漸く以下數項の事を十一月二十日(土)と二十一日(日)の兩日間に亘り行ひました。

一、電車宣傳、

全車臺中央位置にポスターを掲げました

(數日前より)

二、新聞宣傳

三、幼稚園兒旗行列

幼稚園附近を廻る豫定でした。生憎の降雨の爲大分困難でしたが雨の晴間に行ひ、諸所で新聞社の寫眞班が赤い愛護デーの旗を持つた人達の列を寫眞にして夕刊を賑しました。

四、講演及活動寫眞會

二十日の夜をこれに充てました。講師名古屋市視學上田剛氏は、子供の本能のよつて來るところと、それに對する父兄の心得につき、醫學博士森田資孝氏は「民族衛生の鍵は婦人の手にあり」とて婦人の自覺を促されました。活動寫眞は大阪毎日新聞社の好意で借用が出来、幼稚園むきの童謡遊やお伽噺のフィルム等で、大人も子供も無邪

氣な世界に引入れられて大喜びでした。

五、 バンフレット頒布 愛護の衆

講演會の來聽者及幼稚園兒の家庭に頒ちました。

六、日曜保育（在園外の一般幼兒）各幼稚園を開放して。

ボカ／＼した暖い日、數日前からの宣傳の爲か多い園で百五十名少いところでも五十名を下らない幼稚園年齢の子供が嬉しうに親に連れられ、幼稚園兒に案内されたりして來ました。愛護デーの小さい短冊のついた菊の花のマークが小さいお客さんの胸に勲賞の様にかゝり、その日一日つきの先生なのにはやなついて、砂場でトンネルを掘る子や滑り台にかけ上る子、廻轉スケートを試みる者等とても嬉しそうです。實際子供の世界には躊躇も遠慮もあり

七、 ラジオ講演

ませんね、各幼稚園の保育の方法は區々でしたがお話、お遊戲、人形芝居、手等技々、とにかく此の一日は子供にも親にも幼稚園の面白さ良さが判つたものと、え、「又明日ね」と幼稚園の子になつたつもりでさよならをして歸りました。可愛いゝものです。愛護デーのいろ／＼のプログラムの中で一番効果が多かつたと思ひます。その日以後急に入園志望者が澤山出來て斷るに困るといふ園もあります。社會奉仕等と看板をかゝげずに純真な心持から毎日曜日にこんな事がしてやり度いものだと思はずにゐられませんでした。

講師は女子師範學校長伊東武氏、「如何にして兒童愛護の實をあげべきか」といふ題目の下に幼稚園に關係のない家庭にも愛護の

意味が通じた事と信じます。

以上で大略申上げました。子供を愛しない人はなくとも正しい方法か否は大きな疑問です。愛護デーの催はよし一時のお祭さはぎに終らうともその一日は何等かの意味を各人の胸に植付けた事と信じます。例年の行事として今後も全国的に續け度い希望を持つてこの稿を終ります。

島根縣保育會生る

島根縣保育會

さきに幼稚園令發布を機として、多年の懸案であつた、島根縣保育會は、大正十五年十一月六日を以て、孤々の聲を揚げました。縣下十二の幼稚園と、隣縣米子幼稚園の参加によつて、十三の幼稚園を打つて一團とした、保育研究機關の出來た

事をよろこびます。

其創立總會及發會式を、師範附屬幼稚園に於て舉げました。先づ午前十時より總會を開き、錦織竹香先生、山口師範學校長、鹽川、高田、附屬兩主事及各園々長保姆三十三名來會し、山口校長の開會の挨拶があつて、協議に移り、山口校長推されて座長につき、鹽川主事より會成立經過報告あり會則の協議に移り、逐條審議決定の後、役員選舉を行ひ、會長は兩師範學校長の交代とし、總會開催地の學校長を其期の會長とする事に申合ひ、副會長に兩附屬主事を推薦し、總理には間宮學務部長を推戴することに決定して、正午會食を共にして休憩しました。

午后一時より發會式を舉げました。來賓としては、當日の講師として、特に御臨場下さつた斯道の權威山柅代議士、間宮學務部長、錦織竹香先生森岡知事夫人、市長夫妻、其他三十四名臨席、君

が代合唱、勅語奉讀の後、山口會長式辭を述べ、

間宮學務部長、高橋市長、後藤女學校長、澤村小學校長の祝辭高田主事の答辭にて式を終り、次いで、講堂に於て山樹代議士の講演會を開きました。一般公開としましたので、來聽者約四百名、幼児保育についての有益なる講演は、多大の感動を與へました。

次に遊戲室に於て懇親茶話會を開き、先づ錦織先生の、島根縣師範附屬幼稚園創立當時（明治十八年）の懷舊談あり。其當時は拍子木や、十三絃の琴に合せて「一つとやー」を歌つたもので、初めてオルガンを備へ付けた際の如き、箏笛のやうなものだといふので、毎日參觀人引きも切らなかつた等、今日の進歩した現狀に較べて、今昔の感に堪えぬ旨をお話になり、次に並河安來幼稚園長、中田雜賀幼稚園主、今岡掛合幼稚園保姆より、各園の狀況につきて談話あり、盛會裡に薄暮

散會した。

島根縣保育會規則

第一條 本會ハ島根縣保育會ト稱シ縣下公私立幼稚園職員及關係者ヲ以テ組織ス

第二條 本會ハ保育事業ノ普及發達ヲ圖リ會員相互ノ聯絡ヲ取り斯道ノ研究ヲナスヲ以テ目的トス

第三條 本會員ヲ分チテ普通會員 特別會員 名譽會員トス

特別會員ハ本會ノ趣旨ヲ翼賛シ年額金參圓以上ヲ納ムルモノヲ推シ 名譽會員ハ特ニ保育事業ノ爲メニ功勞アル人ヲ總會ノ決議ヲ經テ推薦ス他ハ之ヲ普通會員トス

但シ他府縣ヨリノ入會希望者アリタル場合ハ准會員トスルコトヲ得

第四條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

總理一名 會長一名 副會長二名 幹事

及顧問若干名 評議員若干名

第五條 總理 會長 副會長ハ會員ノ推薦ニヨリ

幹事ハ各園ノ主席保母一名宛常任トシテ委嘱

ス 顧問ハ會長之ヲ委嘱ス 評議員ハ各園ノ

主事園長ヲ常任トシテ委嘱ス

第六條 役員ノ任務ヲ定ムルコト左ノ如シ

一、總理ハ本會ヲ統督ス

一、會長ハ本會ヲ代表シ會務ヲ統理シ會議ノ議

長トナル

三、副會長ハ會長ヲ輔佐シ會長事故アルトキハ

其代理ヲナス

四、幹事ハ會長ノ指示ヲ受ケ會務ヲ掌理ス

五、顧問ハ本會事業ノ援助ヲナス

六、評議員ハ會員ヲ代表シテ會ノ重要事項ヲ協

議ス

第七條 本會ノ事業概要左ノ如シ

一、保育事業ニ關スル協議

二、研究調査及發表

三、講演講習及視察

四、全國保育會並ニ他ノ保育會トノ聯絡

五其他必要ト認ムル事業

第八條 毎年一回總會ヲ開催ス其他會長ニ於テ必

要アリト認メタルトキハ臨時總會部會ヲ開ク

コトヲ得

但シ場所及日時ハ會長之ヲ定ム

第九條 本會維持費又ハ經費トシテ普通會員ハ每

月金貳拾錢ヲ釀出スルモノトス

各園並ニ其園下ノ會費徵集ハ幹事之ヲ取纏メテ

七月十二月三月ノ五日以内ニ事務所ニ送附スル

第十條 本會ノ事務所ハ常分島根縣師範學校附屬

幼稚園内ニ置キ 記錄 會計並ニ會員ノ移動

第十一條 本會規則ハ總會ノ決議ヲ經ルニ非レバ

變更スルコトヲ得ズ

必要アル細則ハ別ニ役員會ニ於テ之ヲ定ム

以上

告 稟

一、幼稚園及び小學校、家庭、育児、看護等に關する論說調査研究等の寄稿を歓迎いたします。

一、寄稿は一行二十六字詰に記して下さい。但改行は一字下げること。また句讀點は一字あけること。

一、寄稿並に本誌の編輯に關する通信、紹介及び寄贈の新刊書、交換雜誌、入會手續、更に

本誌の購讀及び廣告に關する通信並に照會等一切左記編輯兼發行所宛に願ひます。

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内 日本幼稚園協會

一、本誌購讀御希望の方は日本幼稚園協會に御加入下さい居所、氏名を明記し會費前金にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園内日本幼稚園協會に御申込下さい。

一、日本幼稚園協會會員外にて本誌御注文の方は凡て前金（郵税共）で願ひます。（郵券代用の場合にて振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます。）

一、御送金の場合にはなるべく振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます。

一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます。

一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帶封に「前金切」の印章を押捺いたしますから其節は早速御送金を願ひます。

一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます。

定 價

一ヶ月分一冊	金參拾五錢	送料貳錢
半々年分六冊	金貳圓拾錢	送料共
一ヶ年拾貳冊	金四圓貳拾錢	送料共

（外國行郵税は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい）

昭和二年一月十日 印刷

昭和二年一月十五日 發行

幼兒の教育 第二十七卷第一號

編輯兼發行者 堀 七 藏

東京府豐多摩郡戸塚町大字戸塚五七五

印刷者 大杉直次郎

東京市牛込區山吹町一九八

印刷所 大杉印刷所

東京市牛込區山吹町一九八

不 許 複 製
禁 轉 載

發行所 日本幼稚園協會

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

振替口座東京一七二六六番

廣 告

特等面一頁 金參拾圓 二等面一頁 金貳拾圓

一等面一頁 金貳拾五圓 一頁以下御斷

神田區南甲賀町八品田奥松に御申込下さい

少年少女常識叢書

認
定
文
部
省

東京高師茗溪會推獎
各都市教育會賞讚

東京市牛込區西五軒町四十一番地
發行所 文洋社

電話 牛込九一六番
振替 東京一五〇九四番

15 東京小松崎中學三枝著	14 東京小松崎中學三枝著	13 東京小松崎中學三枝著	12 東京小松崎中學三枝著	11 東京小松崎中學三枝著	10 東京小松崎中學三枝著	9 東京小松崎中學三枝著	8 東京小松崎中學三枝著	7 東京小松崎中學三枝著	6 東京小松崎中學三枝著	5 東京小松崎中學三枝著	4 東京小松崎中學三枝著	3 東京小松崎中學三枝著	2 東京小松崎中學三枝著	1 東京小松崎中學三枝著
東小	東小	東小	東小	東小	東小	東小	東小	東小	東小	東小	東小	東小	東小	東小
松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎	松崎
中學	中學	中學	中學	中學	中學	中學	中學	中學	中學	中學	中學	中學	中學	中學
三枝	三枝	三枝	三枝	三枝	三枝	三枝	三枝	三枝	三枝	三枝	三枝	三枝	三枝	三枝
著	著	著	著	著	著	著	著	著	著	著	著	著	著	著
海	空	無	南	昆	人	瓦	發	興	星	動	火	蒸	植	地
中	中	線	半	虫	の	斯	明	味	の	物	と	汽	物	震
旅	動	電	球	の	行	の	家	の	世	の	空	の	の	の
行	物	信	巡	世	く	魔	發	算	生	活	氣	力	界	識
園	園	話	り	界	道	力	家	術	術	術	術	術	術	術

30 東京田邊中學八著	29 東京田邊中學八著	28 東京田邊中學八著	27 東京田邊中學八著	26 東京田邊中學八著	25 東京田邊中學八著	24 東京田邊中學八著	23 東京田邊中學八著	22 東京田邊中學八著	21 東京田邊中學八著	20 東京田邊中學八著	19 東京田邊中學八著	18 東京田邊中學八著	17 東京田邊中學八著	16 東京田邊中學八著
東田	東田	東田	東田	東田	東田	東田	東田	東田	東田	東田	東田	東田	東田	東田
邊中	邊中	邊中	邊中	邊中	邊中	邊中	邊中	邊中	邊中	邊中	邊中	邊中	邊中	邊中
學中	學中	學中	學中	學中	學中	學中	學中	學中	學中	學中	學中	學中	學中	學中
八著	八著	八著	八著	八著	八著	八著	八著	八著	八著	八著	八著	八著	八著	八著
心	鍊	我	現	地	寫	理	飛	北	偉	世	鐵	國	格	算
的	倉	等	代	下	生	化	行	半	人	界	の	の	の	の
算	物	身	識	さ	の	學	機	球	の	の	石	知	知	知
術	語	體	典	り	み	驗	話	涯	候	油	識	識	識	識

後前頁十八百十數畫插裝美判六四

錢六料送

圓壹金各價定

◆呈進本見容内◆

卷十三全

東京高等師範學校府立師範學校各中學校女學校院
教官分擔責任執筆

東京女子高教師 授倉橋惣三
 米國 ア・ラ・ウ・ド・ツ・女史著
 馬場 一定 譯

本日

理想の幼稚園

最新刊

四六版洋装
 百八十餘頁
 定價壹圓五拾錢
 送料拾錢

□ いかによれば保育の理想は實際化さるべきか □ ?

原著者の序 保姆養成所を修了した婦人が、いよいよ幼稚園に行つて實際に
 幼兒を自分の手で保育して行かねばならぬ事になると、誰しも今まで教はつた
 知識は更に役に立たないで、どうしたらいいか、殆んど途方に暮れ勝なもので
 あります。學校では新しい理論には、介傷して居る程でも、今となつて見れば、
 大切な部分は大抵皆忘れてしまつて、度々ノートの御世話にならねばならぬの
 であります。しかもこの虎の巻さへも、時には實際の間には合はぬ勝なもの
 であります。若い保姆さん達の爲に、一方には其の記憶を新にし、且つは幼稚
 園の實際問題に關する根本的な事柄を蒐めるのがこの本の申譯であります。多
 少でもこれによつて保姆さん達の見識を高め、其の仕事の助になる事が出來れ
 ば幸です。云々……

我が國に於てもいよいよ幼稚園令が實施されることとなりました。この際本
 書が紹介されましたことは眞に喜ばしいことであります。本書は斯界の權威た
 る倉橋教授が夙に推賞されてゐるものであり、また譯者馬場先生は現に京都市
 に於いて幼稚園教育の有力な指導者であります。本書が如何なる光明を我が幼
 稚園教育の上に投ずるかは多く問はずして明かでありませう。

東京市牛込區赤城元町
 文教書院
 振替東京四四三三五

謹 迎 新 年

不相變御用命之程偏に願ひ上げます

株式
會社
フ
レ
ー
ベ
ル
館



東京小石川區指ヶ谷町
株式會社
フ
レ
ー
ベ
ル
館

電話小石川六三〇一
振替東京一六四〇